

## 教育の問題を考える

牛島 義友

最近『エンド・オブ・アメリカ』という書が出版されたが、著者のステイブン・シュロスタインは、アメリカ人でアメリカの大学で歴史と哲学を学び東京大学の日本歴史の修士号を獲得、又コロンビア大学のビジネススクールで学び、現在、経営コンサルタント会社を経営している異色の日本通であり、表題のように一九九〇年代は、すでにアメリカ経済の没落とそれに代わる日本、韓国、台湾、シンガポールなどに世界経済の主軸が移動し、それに対する対策を論じているが、アメリカの退行には製造業敗北があるが、その基には人の問題があるとして家庭や教育のあり方について強い反省を説いている。たとえばアメリカの離婚率は一千人に五・二人であるのに対し、日本では一・三人、あるいは片親の家庭がアメリカでは二〇パーセント以上、日本では六パーセントに過ぎない。日本でも

働く女性は激増してはいるが出産休暇の保証があるが、アメリカにはない。すなわち日本やアジアでは儒教的精神が尚強い支えとなっている。また学校の進学率や識字率、学力(数学の国際比較にて日本の方がすぐれている)も日本の方が高いし、また高校生などの不良化、麻薬摂取が目にも余り、それに比べ日本ではまだまだ健全であり、日本に学ぶ必要があるとまで説いている。日本人の立場からは、我が国の教育制度は欠陥だらけであり、進学競争のために学校教育が混乱されていると見ているが、この著者の眼からは日本や韓国の方がはるかに教育的環境はよいと論じている。

たしかに日本の義務教育制度は徹底しており、どんな僻地に行っても立派な学校が造られている。都会の学校こそ生徒達があふれており行き届いた指導は出来そうにもないが、過疎地帯などに行くと、少数の生徒のためにも行き届いた教室と教員が配属されており、却ってこちらの方が子供のためにより教育がなされるのではないかと思われる位である。

ただし日本の教育行政は行き過ぎており、教科書の問題、あるいは生徒指導、服装に至るまで統制が行き過ぎている。日本の問題はむしろ個性の尊重、いかにしたら自主的な創造的な態度が育成されるかの点にかかっている。幼児教育を見ても私立幼稚園協会は一時活発な自主的活動を行っていたが、最近はおっぱら補助金獲得に力を入れ、またひとたび補助金を受けると文部省の行政指導が強化されてくる。今日の私立中、高では補助金で学校経営は完全にコントロールされてしまい、父兄の負担をふやそうとすると、補助金は減らされ、段々画一化されて来、建学の精神や独自の校風はなくなっている。

有名校になると生徒は集まってくるが、そのためには上級学校への進学率が高いとか、大学に附属しているなどが必要となり、真の自由な真剣の教育をするだけでは経営が成り立たない。児童の福祉関係でも似た所があり、障害者の施設福祉と家庭福祉では比較にならない差が出来てしまった。ただ老人福祉に関しては多様性が強く、億単位の入所金の豪華な老人ホームもあるが、また軽費老人ホーム、無料の施設もある。自分の老後の問題として自主的に選択する事が出来る。子供だとして彼自身は生産力はないが、親がついている訳であるから、親の能力と熱意によって区別された待遇が与えられてもよい訳である。画一化のみが公正であると考えるのは民主的な態度ではなく、国家統制が強化されるだけであらう。今日日本での教育問題といえはそれぞれが愛情に満ちた健全な家庭があり、個性が尊重される教育環境がつくられ、このため親たちも自己の責任で幼稚園や学校を選択する事であらう。

(元お茶の水女子大学教授)